

つかしく拝見いたして居ります。
 三の丸御殿保存に付いても大変御心配下さつてゐるの
 は、只感謝の外御座いません。
 私の思い出—あの三の丸の御殿。 唱歌室、岡崎
 先生が、花子さんが、ヒバリの歌を、空を見あげてうな
 づいてゐる画を、上手ななと思ひながら、皆で声を張り上げ
 歌つた。うす暗い教室でした。

佐伯ははめずらしく雪の降つた時でした。私は高下駄
 へ今思ふと馬鹿らしいをばいて出かけた。齒は雪
 がつまり、よろ／＼として大きな石や電信柱で雪を落し
 なから行くうち、先生がむかひに赤で下まつた。あの石
 畳を、先生に手をひかれ、這う様にしておらぶき屋根の
 校舎にたどりつきました。

あの石畳の上のやぐらで、じんろくさんが十二時の太
 鼓を打っていました。ドン／＼と……
 又、じんろくさんは御殿の裏の片すみで、ゾーリを作
 つて売っていました。あらゾーリニ交五登、竹の皮ゾー
 リニ交。少しは女おに赤い布でも入れておると、とても
 とてもうれしかつた。

私共年代の人々には、いゝ／＼と思ひ出があります。し
 かしその思い出のある無しにかかわらず、三の丸にお城
 の御殿が残つてゐるといふことは、なんとすてきな事
 でしょう。佐伯に生まれ佐伯に育つた人なら、きつとす
 つかしい思い出の定物だと思ひます。

何とか残して置いてほしいものですね。あの太鼓も御
 殿の片すみだけでも保存されたらなあと思ひながらペンを
 置きます。

史談会へ回封（法金三千円）お送り致します。お受
 けとり下さいませ。

どうか良いお年をお迎え下さい。
 明治二十七年生れの私。目もめるく文士あときき、お
 読みにくい事と存じます。御推読下さいませ。
 (以上)

研究

郷土の先覚者たち

— 塑像と頌徳碑より —

会員 山本 保

(佐田市池船区)

(一) 河野 豊氏

弥生町植松、暖宕神社鳥居横（旧明治村役場前）に、
 河野豊氏の半身像（塑像）が立てられてゐます。

（台石正面文字）

河野 豊氏像

（台石裏面文字）

明治三十五年五月市野瀬平太郎氏ノ後ヲ承ケ、二代
 目明治村長ニ選任、大正二年五月迄四期滿十六ヶ年
 ノ長キ間、銳意村政ニ尽瘁、幾多ノ功績ヲ残ス。

時ニ明治三十一年より同四十五年ニ亘リテ、村内ニ
 存スル官有林全部ノ松下ヲ達成シ、其ノ一部ヲ關係
 部落及寺院ニ、残余ハ本村有林野ニ編入ス。
 是ガ爲、後代村長ノ被ムル恩惠ハ、蓋シ計リ知レザ
 ルモノアリ。茲ニ其ノ功業ヲ顕彰シ、洪恩ニ対シ感
 謝ノ誠ヲ捧ゲンタメ、此ノ尊像ヲ建設ス。

昭和二十六年十月建設

(注) 弥生町麻木隧道北側にある麻木隧道拡張記念碑
 (石原忠惠筆蹟、秋月新太郎撰文併書)の文中
 に、明治村長河野豊の名が記載されています。
 明治三十五年六月建立。

弥生町小浪(旧明治村)の国道一〇号線沿いに、勲功
 記念碑があります。

勲功記念碑

(裏面文字)

此二刻スル五十二氏ハ明治三十七八年、戦役ニ従軍
 シタリ。

此ノ役々、振古ノ大戦ニシテ、我軍陸ニ海ニ連勝連
 勝、交戦二十日終ニ敵ヲシテ樞木ノ半部ヲ納メシメ、
 以テ和ヲ講ズ。

國光仍テ輝キ、東洋仍テ安ジ、五十二士義勇奉公克
 ク其任ヲ全クシ、郷党相共ニ榮ヲ分ツヲ得、而モ二
 士ヲ失フニ過ギザリシハ蓋シ天祐也。

茲ニ御覽謀ヲ碑ヲ建テ、以テ芳名ヲ不朽ニ伝ヘント
 欲シテ、余ニ記ヲ請フ。余不文也ト雖、義碑不可ラ
 ズ。則チ叙スルニ梗概ヲ以テヌト云爾。

神武天皇即位紀元二千五百六十八年
 明治四十一年初秋

明治村長 魚六等河野 豊謹識

(正面文字) 一 詳細略す

陸軍二等勲医従七位勲六等松本義昌、外四十九名、
 女ふひ、

故陸軍歩兵上等兵勲八等 高司務太郎
 故陸軍歩兵上等兵勲八等功七級 平川源太郎

(注) 碑文は、明治村長河野豊による。文中ハ二氏と

は、右ノ二方ハ故高司務太郎、故平川源太郎
 といひます。

河野豊翁曰、旧明治村にてしては大恩人です。

(二) 黒木幸太郎氏

佐伯市長谷トシネル近く、次ハ石碑が建てられてい
 ます。

(正面文字)

黒木幸太郎翁頌徳碑

参議院議員 後藤文夫書

(背面文字)

清康義侠、寛政周密果斷ナル國士ノ風格ヲ以テ、村
 郡、県會議員、各種國体長トナルコト四十有余年。

畏クモ總裁殿下、農商務大臣ヨリ有功績章ヲ授ケラ
 レ、佐伯町長在職中、昭和十四年一月二十三日、七
 十七歳ヲ以テ卒去。

偉績ヲ追慕シ、所葬ノ礼ヲ行フ。

佐伯町長 高 司 正 直

昭和二十八年一月十九日、市町有志ニヨリ記念碑建
 設準備委員会結成、同二十九年四月二十九日黒木幸
 太郎翁功績顕彰会ヲ組織シ、特志者寄付並関係市町
 村及旧上堅田地延等副修補助ヲ以テ碑石ハ、大越川
 ニ求メ、同三十四年二月三日竣工ス。

- 顕彰会会長 石田 豊
- 準備会会長 内田 治助
- 全 副会長 水川 福治郎
- 会 計 武田 作二郎 (大越出身)

幹 事 清原善太郎
 幹 事 赤井覚治郎
 書記 白井龍峯
 佐伯市石工 宮谷猶太郎

(注) 大越川(佐伯市大越川)。佐伯市(旧上堅田村)大越は黒水幸太郎翁の出身地。

佐伯市久部(旧上堅田村)の耕地整理は、明治四十四年、上堅田村長黒水幸太郎在職中に竣工しました。その記念碑は、篠崎公園(別名堤公園)に立っています。多田太郎吉氏は「西畑の役と黒沢」(佐伯史談会二十七年)第六話で、次のように語っています。

「中山(旧上堅田村)には今は立派な隧道ができています。昔は坂を二つ越せば佐伯町にはいかれなかつた。負傷兵をタンカでかついて坂を越えるとき、『国の親たちを一目おいて』と云つて、やがて息をひきとつたと、私方にどまつていた兵隊さんが話したと、(祖母の話)

その後、二つのトンネル(池田隧道、中山隧道)ができました。そして大正十四年に、現在の四つのトンネル(池田、中山、西中山、長谷の各隧道)がつくられた。現在のものは、黒水幸太郎氏の尽力で完成したもので、一名黒水トンネルと呼ばれています。おたした方が子供の頃は、前者を旧道と呼び、後者を新道といっていました。

新トンネル(長谷隧道)の近くに、黒水幸太郎翁の徳碑が建立されていることと、奇しき因縁と云つてよいでしょう。しかもその碑石(自然石)は、翁が生まれ育

つた旧上堅田村大越川から取り寄せたもので、昭和四十五年元旦朝、その昭徳碑には供之餅(鏡餅)が飾り付けられていました。なんと心が暖まる思いではないになりましう。

昨年五月五日(子供の日)、佐伯史談会員は直川の村裏、横川、赤木を訪れました。

その時、案内された佐伯史談会友柳井龍雄氏が、赤木の道路を指して話された、「この道は、黒水幸太郎氏が作られた」という言葉が、強く印象に残りました。大越と赤木とは道路が相通じており、四輪車で往復ができます。

市野渡仁先生も、「佐伯港はどんな働きをしてゐるか」——葛藤——の研究で、次のように述べています。

「今に始まつたことではないが、名町長として尊敬された黒水町長の頃のこと、今の防波堤は工費三百田の中かにて原案通りつくられた。それがたぬ南東の風と波を吹きこみ、暴風雨の時は、大潮が洗つて葛所民を駭かせない、住民の声を聞かない粗上のプランであつたという声も聞かれました。」

(注) 黒水町長のおられる通りは造つておられたよかつたのに、予算の都合で国が工事を縮小したのでしよう。

久部の耕地整理、中山の四つのトンネル、赤木の道路、葛藤築造等から、黒水翁の偉績を充分に窺うことができます。

黒水幸太郎氏と佐伯市とは、切つてもきれない関係に

ありませす。

(三) 足田慶次郎氏

佐伯市役所下堅田出張所前に、次の石碑があります。

(正面文字)

足田 翁 頌 徳 碑

(背面文字)

足田慶次郎翁は、資性温厚にして身を持守ること蓋
蒙、御党の倍鞭を荷ひ、明治四十三年村長に就任、
幾多公職を兼掌し、功績三十三年熱誠村治に精勵し、
昭和二十七年九月内閣総理大臣より自治功勞者とし
て藍綬褒章を賜あり、其の功績を表彰さる。

特に村有尾高山の統合経営に依り、村財政の基礎を
確立し、今日の平和郷を収らる。人其の徳を慕ひ、
茲に頌徳の碑を建立する。

昭和三十年三月十日

村 長 今 山 令 市
佐伯市石工 宮 谷 猶 太郎

大正七年四月三日建立の尾高山記念碑の右側面に、功
勞者足田慶次郎の名前が刻みこまれています。

また、津志河内橋へ田下堅田村側のたもとにある石
碑にも、村長足田慶次郎の氏名がつけらねられています。
碑文左の通り。

(正面文字)

架橋記念碑

柳々下堅田村大字長良字津志河内部落へ堅田川ト水
立川ノ合流点ノ西南岸ニ位シ、戸数六十四、人口三
百有餘、耕地面積八十餘町、山林二百町歩ヲ有シ、

住民ハ農耕ヲ業ミソノ生産物ハ相当多額ニ上ル。
然ルニ之が市場搬出ニハ、渡船ニヨリテ辛ウジテ舟
ヲ辨ジツツアリシモ、強風雨ノ時及夜間ハ交通杜絶
シテ、約一里余ノ相距方面又ハ木立村角道ヲ迂廻セ
サルベカラズ。又市内ニ出動通学スル者等ノ不便少
ナカラズ。

依ツテ之が架橋ヲ熱望スル声累リナルモ如何セン、
川幅広ク新^{あは}へ河床泥質ニシテ、多額ノ工費ヲ要スル
ヲ以テ、僅カ六十餘戸ノ小部落ノ負担ニ於テ、之ガ
実現ハ容易ナラザリシカ。

区民一同協心戮力、部落ノ盛衰ニ關スル架橋ヲ計画
シ、昭和十六年二月議案可決、関係民ノ了解及其勸
ノ認可ヲ得、工費九千余円ヲ投ジ、同年五月着工、
延長八十間、幅員九尺ノ木橋ヲ架設、同年十月二十
三日竣工式ヲ挙グルニ到リ、茲ニ多年ノ要望ハ達成
セラレタリ。
区民及び一級通行者歡喜、便益甚大ナリ。故ニ謹ン
テ、関係当局者ノ賛成ヲ感謝スルト共ニ寄附者、芳
名ヲ勒ニテ、以テ記念トス。

昭和十七年九月

津 志 河 内 区 民 建

(左側面文字)

昭和十六年五月二十一日起工
同 年十月二十三日竣工

総 工 費 九 千 圓

石 工 松 谷 松 男

(右側面文字)

架橋世話人、村長足田慶次郎、区長、委員の氏名が
きこまれています。

裏面には寄附者の芳名がみられます。

佐伯市西野部落(旧下堅田村)地蔵堂にある耕地整理記念碑(昭和二十一年八月一日完工)の背面には、組合長足田慶次郎以下組合役員、組合員の氏名が逐記されてゐます。

足田慶次郎翁は下堅田の大先達です。

(四) 深矢恭次郎氏

佐伯市橋垣(旧鶴岡村)龍護寺境内にある、川野良治近衛兵(日清戦後で戦死)の記念碑(明治二十年十月建立)に、深矢恭次郎氏の名前が、世話人として逐記されてゐます。

佐伯市門前(旧鶴岡村)庵の境内には、鶴岡小学校訓道兼校長深矢恭次郎撰書の忠魂碑(明治三十七年十二月建立)があります。

佐伯市星宮(旧鶴岡)聖山にある鶴岡村忠魂碑の碑文は、深矢恭次郎(羽峯)の書によるものです。昭和三年四月建立

又佐伯市白濁より高谷(旧鶴岡村)へ通ずる三叉路付近に、次のような石碑が倒れたままになつてゐます。

(正面文字)

高谷白濁開道路開通記念

(右側面文字)

大正十五年二月十四日 起工

大正十五年四月 四日 竣功

工費 貳千貳百圓

(左側面文字)

村長 深矢恭次郎

訓導として、校長として、また村長として、鶴岡村の為に尽くされた御功績を、沢山と石碑によつて察知する事ができます。

鶴岡の今日の繁栄は、深矢恭次郎翁に負う所がたゞです。わたしたちは翁の徳を充分に元ましよう。

元明治村長 河野 豊氏

元鶴岡村長 深矢恭次郎氏

元上堅田村長 元佐伯市長 黒水幸太郎氏

元下堅田村長 足田慶次郎氏

以上四氏を御上の先覚者として尊び、その業績を調査研究したいものです。同時に、先人の偉業と一つの足掛りとして、おたしたちは御上を益々住みよい市町村に仕上げたいのです。

年表 (参考資料)

年号	事	項
明治三〇	川野良治記念碑建立	
三二	河野豊明治村長就任	
	佐伯四降孔道(麻木隧道)大拡張	工費 貳千九百圓
三七	溝口喜一郎忠魂碑建立	
四一	明治村(大坂本、天間)勲功碑建立	
四三	足田慶次郎下堅田村長就任	
四四	久部耕地整理竣工(工費四千五百圓)	
大正二	河野豊明治村長退任	
七	下堅田に尻高山記念碑建立	

年号	事項
大正一二年	女島橋架橋
一四	中山新トンネル完工
一五	高谷、白濁間道路開通（工費老千貳百圓）
昭和 三	鶴岡村忠魂碑建立
九	黒木幸太郎佐伯町長就任
	葛港の防波堤着工（昭和十三年完成、工費三二千圓）
一 二	鶴岡村、上堅田村と合併し新佐伯町となる。
一 四	佐伯町長黒木幸太郎没、高司正直後任となる。
一 六	津志河内橋撤工（工費九千圓）
	佐伯町、大八島、八幡、西上浦各村を合併して市制を施行
二 一	下堅田 <small>（川内）</small> 西野耕地整理完工。
二 六	明治村大坂岸に河野堂像建立。
二 七	足田陵次郎盛徳褒章を受く。
三 〇	足田翁頌徳碑建立。 香山、下堅田、水立村を佐伯市に合併する。
	出納菊二郎市長就任
三 四	黒木幸太郎翁頌徳碑建立。

（お断り）碑文の句読点、段落は、諸人易くするためにあつし、独断で付きました。（元日の追記）

（余日の埋め草まで）

編集子）

山本会員曰、今回又佐伯市近郊ノ農山村地帯の四人の先賢指導者のプロフィールを、記念碑も頌徳碑の

文章から求められた。これは何度も何度も運代一字一句と丹念に採録せねば叶わないこと。大変根気のいる仕事である。
特にどうかすると思つた。勝つて落傍の頌徳碑も記念碑、それは僅か数十年前の前のことであるのに、当時の関係者は次々と亡くなり、明治、大正、昭和の時の流れの彼方には、御上の歴史的な人物の事蹟は消えつつある。故つておけないことである。

研究

佐伯の港はどんな働きをしてゐるか

——主として水枝の流通について——

大分県立佐伯豊南高等学校
教諭・同校潮土港クラブ顧問
水会会員 市野 瀬

仁

第二章 佐伯港

第二節 その社会的環境（つづき）

二 佐伯海上保安署

元防備隊本部の長い平屋の中央に、海上保安署と航路標識事務所が看板が左右にかかつてゐる。

鶴谷港に繫着した海上保安署専用船の甲板で、私達を待つていて下さった保安官は、軍隊風の口調で長々と仕事の説明をなさる。まもなく狭い船室にぐわつて入ると二人の保安官も居て、私達の質問に親切に答えてくれた。貴重なお茶を飲みながら、聞いたり話しかけたりす